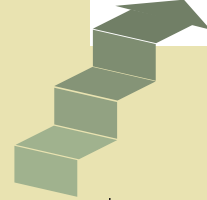


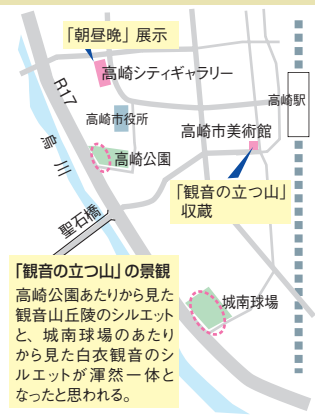
「詩魂の画家」 山口薫の原風景



■油彩「観音の立つ山」
(1959年 キャンバス 31.8 × 40.9cm)



山口 薫 (1907～1968)
Kaoru YAMAGUCHI



「観音の立つ山」の景観
高崎公園あたりから見た
観音山丘陵のシルエットと、
城南球場のあたりから見た
白衣観音のシルエットが
渾然一体となったと思われる。

詩情豊かな画風で戦後の画壇を牽引

●郷土は熱く私を育む

「背に榛名の山々が六曲一双の屏風にひとつひとつはめこまれるようにポコンポコンと並んでいる。その裾の丘陵のひとつに私は生まれた」。山口薫は明治40年（1907）8月に高崎市箕郷町（旧群馬郡箕輪村）の旧家に誕生した。旧制高崎中学に入学し、穏やかで純粋な人柄の秀才だったという。少年時代から豊かで詩的な感性に恵まれ、中学2年の時に、姉に油絵の具を買ってもらった。「試験がすんだら油絵をうんと描こうと思う。急に絵が書きたくなった」と絵に熱中し、写生によく出かけていた。

「私が愛する故郷。こうした題を出されたら一巻の書物くらいはたちまち書いて終いそうだ。（略）郷土は熱く

私を育む」と山口は故郷への思いを記している。

●僕は詩人なのだ

高崎中学校を卒業後、山口は東京美術学校（現東京藝術大学）に入学し、在学中から帝展などに出品し入選していた。卒業後は渡欧し、セザンヌやピカソなどの作品から、近代絵画の造形思考を吸収した。前衛的な美術の発表の場を求め、自由美術家協会、モダンアート協会を結成し画壇に大きな影響を与えた。山口は国内外で高い評価を受け、東京藝術大学に迎えられる。

山口は29歳の時に挫折し、憔悴の底に沈み帰郷するが、故郷の友人や後輩の画家松本忠義らは暖かく迎え、再び山口に画筆を持たせた。戦前、絵が売れない時代の山口を支えたのも井上房一郎氏など高崎の理解者だったようだ。

1955年、山口は旧高崎市役所の玄関ロビーに幅6・56mの大作「朝昼晩」を描き、現在は高崎シティギャラリーに移設、展示されている。「僕は詩人なのだ」「詩が僕を支えてくれる」と山口自身が語るように、その作品は

詩情的、幻想的で深い精神性を表現している。

●「観音の立つ山」

故郷高崎は、山口芸術のモチーフの一つになっているが、山口が高崎市のシンボル「白衣観音」を山口独特の叙情あふれる抽象表現でとらえた作品が残っている。この「観音の立つ山」は高崎市美術館に収蔵され、高崎公園あたりから見た観音山丘陵のシルエットと、城南球場のあたりから見た白衣観音のシルエットが渾然一体となった、現実には存在しない風景といえる。高崎市美術館は、「白衣観音の大きさから考えると、空を飛んでくる鳥たちの視点からとらえた光景かもしれない」と言う。

この作品が制作された1959年は、山口の画風に大きな変化が見られる時期で、風景や人物の描写はいっそう幻想性を増し、心の中に現れては消えるイメージという性質を強めていく。この観音の姿も、詩魂の画家と呼ばれた山口の望郷の思い、心象風景なのかもしれない。